



第14号

2015年12月22日

会 員 募 集 中

年 会 費 二 千 円

十 月 以 降 入 会 千 円

回顧と今後の展望

岡山歴史研究会設立五周年にあたって 会長 天野勝昭

岡山歴史研究会は設立総会を平成二三年十月十四日に後楽園鶴鳴館において開催し、発足しました。そして本年、設立五周年を迎えられたのも設立準備の段階から今日まで、顧問、会員の皆様をはじめ、関係各位のご理解、ご尽力、ご支援の賜物とまずもって感謝とお礼を申し上げる次第です。

設立経緯は会報四号の山崎副会長



▲白内障手術で先の見通しがよかった? 天野会長

による「岡山歴史研究会設立時の回顧」をお読みいただければと思いますが、平成二三年三月、東京の全国歴史研究会本部から来年の全国大会を岡山で是非開催したい。全国歴研としては、早くから岡山を全国大会の開催地と思っていたが、受け皿となるだけの団体が出てこないのが実現できていない。私が岡山城築城四〇〇年事業の責任者を務めた経験をもとに頑張っただけではいただけないかという吉成代表の熱い要請に応じたことに始まります。

五年間を振り返ってみますと、既存団体で経験を積まれている多くの方々が設立準備段階からご協力くださり、そのネットワークから会員が増加してきたことが今日に至る原動



▲竹本弘子氏の講演を聴く参加者

設立五周年記念 会員交流会

力になっていることを第一にあげます。そして、年々活動内容が充実してきていることは、会報の「歴研展望」で触れている内容でも示してききましたが、皆様の熱意と創意工夫によつて年間行事のベースとなるものが出来つつあると感じております。

しかし、このままで十分というところでなく、継続、発展のためには安定した財政運営とそれを可能とする運営、活動体制の確立が不可欠であり、私見ですが、五つの常設委員会それぞれが会計面も含めて独り立ちの形で運営され、委員会の検討結果等を事務局が取りまとめ、運営委員会、正副会長会議で結論をだして実

施するというサイクルを確立していくことによつてこそ活動内容にも変化、充実をもたらすものと考えています。

会費の値上げ検討もその一環であることをご理解いただき、また先月二五日には初めて会員交流会を開催し、参加された方々から忌憚のないご意見、問題点のご指摘を頂いたことも今後の足がかりにしたいと思います。

これからも更に楽しい、参加して良かったと感じて頂ける会にして参りたいと考えておりますので、各位の倍旧のご理解、ご協力、ご支援を改めて心からお願いいたします。

去る十一月二十五日(水)午後から設立五周年記念の会員交流会が岡山国際センターで開かれた。三十九名が参加。天野会長はいにく目の治療中で欠席。挨拶文が代読された。会員のみなさんの忌憚のない声が聞きたいとのこと。続いて山本事務局長が「五年の歩み」と題して会設立の経緯そしてこれまで《次頁へ》



▲グループ代表 佐藤氏発表

《前頁から》やってきたことをパワーポイントで映し出した。記念講演は全国歴研運営委員で当会会員の竹本弘子氏。「岡山歴研への思い」と題して、特に朱に焦点を当てての話題。朱は徳島の古墳、岡山の古墳に見られる。日本におけるその産地、精製等について話された。

続いて交流会。まずはテーブルごとに、更に広げて全体で名刺交換をして和やかな雰囲気が出された。そしてグループごとに「これまでの歴研、これからの歴研」をテーマに話し合いが行われた。討論の後、各グループの代表が話し合った内容、提案等を発表した。

続く懇親会には二十八名が会場を近くの宴会場に移し、さらに和気あいあいの中、親交を深めた。

各グループから出された論点を列記すると以下の通りである。

- ・岡山は著名な宗教家を排出。宗教的風土に焦点を当ててはどうか。
- ・産業、岡山では多量の鉄、銅を多く産出している。その歴史的関わりに興味がある。
- ・歴史的事実も比較検討しないと客観視できない。
- ・備後地区の探訪会が印象に残った。不思議なことを見つけ、それを解明していくのが歴史を研究する楽しさだ。
- ・天野会長、山本事務局長はよくやっており、それで五年続いた。
- ・これからは時代区分、分野区分を設け、委員会方式でやるのが良い。
- ・研究にもっと力点を置くのが良い。
- ・参加意識が高まる工夫が必要だ。

この五年は試行錯誤の連続だった。



▲祝宴で法被を着て岡山をアピール(記念講演講師2人と)

旧国単位(例えば備前、美作)での歴史をまとめてはどうか。

何を指すかを決めないままに設立したことが焦点の定まらない原因になっている。

岡山と言えど古代、吉備の国になる。それだけでいいのか。

全国歴史研究会全国大会が十月十六日～十八日、鳥取市で開催された。全国から約百二十名、岡山から二十一名が参加した。

記念講演は二題、①「邪馬台国山

全国鳥取に二十一名参加

- ・反対意見も戦わせることができる
- ・歴研であってほしい。
- ・研究発表をして記録に残すことが大切。

これらを踏まえ、三役会議、運営委員会が開かれて更に検討される。

陰説「古代日本の中心は山陰地方だった」講師は田中文也氏、②「秀吉の鳥取城攻めと吉川経家」講師は岡村吉彦氏。

祝宴・交流会ではおかやま観光コンベンション協会の法被で岡山をアピールした。

二日目見学会(中世の鳥取を体感)

①仁風閣②鳥取県立博物館③池田家墓所④宇倍神社⑤因幡万葉歴史博物館⑥因幡国庁跡を見学。

三日目見学会(古代の鳥取を体感)

①白兔神社②倭文神社③倉吉白壁土蔵群(大岳院)④妻木晩田遺跡⑤溝口楽々福神社を見学。

三日間晴天に恵まれ、中世と古代の鳥取を体感できた。

来年は三重県津市で開催される。

明治元年に発生した神戸事件(備前事件)

会員 能勢初枝(神戸市在住)

街の真ん中で起こった
小さな衝突が発端

神戸の三宮の名前は、大丸神戸店の傍にある「三宮神社」に由来する。ちなみに、神戸市内には一の宮から九宮まで現存する。この小さな三宮神社に不釣り合いな大きさの「史蹟・神戸事件発生地」という石碑が、歩道に向かって立っている。いまでは「神戸事件」といつても知る人は少ない。

しかし、慶応四年一月十一日のこの事件と続く二月十五日の堺事件によつて、我が国が「尊主攘夷」から「開国和親」へととはつきり舵を切る契機となった。



▶三宮神社にある神戸事件の石碑

事件が起こった慶応四年(1868年)は江戸幕府が終り、九月に元号が明治になった年

である。

王政復古古よつて出来たばかりの新政府は、譜代の尼崎藩(松平家、四万石)を牽制するために、備前岡山藩に、西宮の警備を命じた。岡山藩は二千人の兵を送りだし、うち五百人は家老の日置帯刀(ひきたてわき)に率いられて、陸路西国街道を進み、正午ごろ三宮神社前を通りかかった。

その時二人の外国兵(フランス兵といわれている)が行列の前を横断しようとした。岡山藩はこれが無礼として、歩兵隊長の瀧善三郎が槍で突いた。すると、もう一人が短銃を構えたので、「鉄砲、鉄砲!」叫んだところ「発砲!」と聞き違えた備前兵が威嚇射撃を行った。

この騒ぎを港の「海軍操練所」跡(そのわずか一年前にすでに閉鎖されていた)の屋上で知った英国公使ハリー・パークスは、イギリス兵を繰りだし、さらに港に停泊していたアメリカ、フランスの軍艦に連絡して、備前兵に砲撃をしかけ、港にい

た日本の各藩の軍艦を拿捕した。當時は幕府が瓦解した直後で、兵庫奉行もおらず神戸の町は無法に近く、一触即発。こんな大事になるとは考えてもいなかった備前兵は、反撃する気もなく、大砲も荷駄も放棄して山手へ退却した。

二人の外国兵も無事で、この間、一人の死者も出てない。

治外法権の「外国人居留地」

嘉永六年、ペリーの浦賀来航で「日米和親条約」が締結され、さらに安政五年(1858年)大老・井伊直弼によつて締結された五か国条約「安政仮条約」によつて、我が国は列強に居住地を提供しなければならなかった。

慶応三年(1867年)孝明天皇の崩御で兵庫開港が決まり、すでに開かれていた神奈川、長崎、函館など他処からみれば十年遅れて、兵庫に居留地が設けられた。強烈な攘夷論者であった孝明天皇は、京に近い兵庫の開港を認めなかったのだ。

幕府は、人家の多い兵庫を避けて、当時寒村であった神戸村を居住地として提供した。



▲外国立会人を面前にして瀧善三郎切腹の図(カネテツデリカフーズ(株)所蔵)

最初に神戸村に上陸したある外国人は「なにもない、ただのただっ広い砂地に驚いた」と神戸の印象を述べているが、なにもない場所が幸いして、ヨーロッパ式の最新の都市計画が実施され、現在のハイカラな神戸の街の元が出来あがった。

しかし一方、当時、外国人居留地は、治外法権で、日本の警察権も司法権も介入できない取り決めであった。さらにこの時、海軍操練所後の港や岸壁などまで連合国側が支配していた。

五連合国側は、神戸村での出来事について、日本側に対して、責任者の極刑と賠償を要求して《次頁へ》



▲ 瀧善三郎肖像画
(会員 吉井眞氏蔵)

《前頁から》きた。日本から見れば、連合国側が明らかに理不尽にもかかわらず、外交に不馴れなばかりか、まだ、外国に対して天皇親政の宣言もしていない新政府は、いま外国に攻められては大変だと、卑屈にもなって驚きあわてた。文久二年(1862年)の「生麦事件」による、薩英戦争の苦い記憶も新しい。

一月十五日、天皇は神戸へ勅使を派遣して、日本の国が武家政治から天皇親政に代わったことをしらせるとともに、伊藤博文、陸奥宗光を交渉係にあてた。下級武士ではあったが、伊藤は文久三年から一年間、イギリスに留学したことがある。伊藤は英国公使パークスに面会し、処分の撤回を求めたが、彼は聞く耳を持たなかった。

瀧の切腹で決着 「備前事件」顛末

結局、日本政府は彼等の怒りを鎮めるために、瀧善三郎を人柱として差し出し、彼の切腹と日置帯刀の謹慎でことをおさめた。

忠義な武士であった瀧にすれば、「武士諸法度」に則って無礼者を懲らしめようとして、言葉が通じないので、槍で突いたにすぎなかった。

瀧善三郎正信は、備前藩池田家の直接の家臣ではなく、家老日置家に仕える陪臣だった。幼くして萩原流砲術家の父を失ったが、小野一刀流の剣術を修め、十七歳から日置帯刀の側近を務めていた三十二才の立派な武士であった。

この事件の直前に、長州、薩摩が攘夷を捨てて開国に転じていたこと



▲七曲神社(御津金川)の境内にある義烈碑と会員 吉井眞氏

を、瀧は知らなかった。彼は切腹の前に「自分は遠国の人間で、朝廷が外国人を丁寧にあつた方針に変わったことを知らなかった」と語り、「王政復古により、国法が変わったため、切腹させられるのだ」と自らを納得させて、新政府の命令のままに、五連合国の外国人が興味津々で見つめる前で、永福寺において、正式な武士の作法で切腹した。

瀧には四才の息子と二才の娘がいたが、子等に「忠孝道を守り、御奉公第一に候」と遺書を書き、妻や姉には「今ははや森の日陰になにぬれど朝日に匂ふ大和魂」の歌と「春風の吹き入るままにはつ旅寝」の句を残した。

日本の大きな転換点に、犠牲となった一人の武士の死を悼んで、人々は永福寺に瀧の立派な供養塔を建てた。(現在、供養塔は兵庫大仏などのある能福寺に移されている)

もう一度言うが、この事件では一人の死者も出なかった、だからこそ外交手腕が試される場面だったが日本側の外交下手で備前藩士瀧善三郎は犠牲になった。瀧の犠牲で、ともかく日本の国は列強からの攻撃から

のがれることができた。

この事件から一カ月後の二月十五日、「堺事件」が起こる。堺の町を警護していた土佐藩士とフランス兵との衝突で、土佐側が発砲し、フランス兵に十一人の死者が出た。やつと「神戸事件」が解決したところへの知らせに、政府は驚愕し、謝罪の特使を送った。フランス側の要求は、土佐藩の加害者全員の死刑と十五万ドルの賠償など十五項目にわたった。

交渉の末、切腹は十八人に絞り、堺の妙国寺境内の外人たちの眼前でそれは行われた。さすがに、フランス側も凄惨な切腹の様子に、十一人目のところで止めさせて、残りは流罪にした。

この二つの事件によって、開国の機運は進んだが、日本人の命を犠牲にしての開国和親であったことを忘れるわけにはいかない。



▲瀧善三郎生誕地碑(御津金川)

六十代続いた 備前刀匠「祐定」

後楽園に通じる鶴見橋の手元に一つの石碑がある。刀匠碑と書かれており、一振りの刀が埋め込まれていて元之進祐定終焉の地とある。

ここ岡山市出石町は、備前刀の刀匠、六十代続いた元之進祐定が、昭和四年、八十歳にして研ぎ師の家で逝去した終焉の地である。

瀬戸内市長船町に「造剣之古跡」と書かれた大きな石碑が立っている。

裏面に「大正十四年九月立石、友成後裔横山元之進祐建」とある。この人こそ横山系刀工の最後の人、祐定である。

刀剣については国指定の刀剣が



▶造剣之古跡碑(瀬戸内市長船町)

八百十口あり、その内約五割が備前刀と備前刀で占められている。在銘刀では七割が岡山の刀剣である。それは福岡一文字派の則宗、吉房、長

船派の光忠、景光、盛光、与左衛門祐定などの刀匠になるものである。長船刀工の祖は近忠と言われているが作刀は残っていない。その子息、光

忠は優秀な作刀を残しており、長船第一の名刀匠と評されている。没年が文永八年(一二七一年)であるこ

とから、その最盛期は鎌倉時代の初期である。その子、そして孫も名匠と言われ、併せて、各刀匠の出現によつて備前長船刀が天下に響き渡つたと考えられる。

しかし、天正十年(一五八二年)

の吉井川の大洪水で福岡の半分が河底に没し、約四百年続いた長船鍛冶は横山一派を残すのみで壊滅した。

これ以来、新刀期に入り、わずかに祐定により名刀が作られている。

高松城の水攻めの折、城主、清水



伝月清入道切腹短刀

天正10年(1582)6月4日、備中高松城水攻めの講和条件として切腹した清水宗治とともに、その兄月清入道が自刃した時に使用した短刀と伝えられる。「天正三年二月 備前長船住祐定作」の銘がある。

▲清水 男氏蔵

短刀には祐定の銘があり、子孫の清水男氏(当会顧問)が今でも所有している。

江戸時代になると藩主の庇護のもとになり、横山系の祐永、祐包により細々と作刀が続けられてきた。

明治になり、廃刀令が出され、そして六十代続いた刀匠、祐定は昭和四年ついに絶えた。

(本文は当会顧問白井洋輔氏監修)

祐定の一考察

大河原 喬(当会顧問)

備前刀匠の名跡で六十代続いた系譜がある。それは初代友成から数えて六十代目の祐定である。元之進祐定・又は潜龍子祐定とも云われる備前刀匠である。

ところが、元之進祐定の息子、祐一が早生し、祐定も昭和四年(一九二九年)十一月二十五日、八十歳で逝去し、約六百年続いた長船鍛冶の槌音は断えたのである。

元之進祐定は、勿論、備前長船に居て作刀技術を練磨していたのだけれど、明治時代になって廃刀令、ならびに武士の消滅に依り継続は断た

れた。

その後、元之進祐定は、娘の嫁ぎ先である岡山市中出石町に移り、市内では作刀は出来ないで、刀剣研磨の道をなりわいに暮らしたことから出石町との関わりができた。その地に、平成二十一年、祐定終焉の碑が建立され、其の除幕は多くの人で挙行された。

岡山には「温羅」と云う伝説がある。温羅と云うのは、鉄器を持ち強大な権力を成立させていた経営集団と見なされる。大和朝廷は青銅器しか持っていなかった《次頁へ》

《前頁から》為、鉄器は大きな目標であったと推測される。

その朝廷に依り、鉄器生産を懐柔しようとして起こしたのが桃太郎伝説といわれる四道將軍、吉備津彦命の派遣と云う政策でもあった。

桃太郎伝説の終わりは、鵜と成った吉備津彦が鵜と成って逃げる温羅を血吸川の下流で喰い果し、鵜喰神社で首をはねて終末する。

この血吸川の赤は、血でなく鉄の錆であると考えれば温羅の権力の背景で鉄の精錬作業の結果の錆と考えることもできる。

赤磐に血洗いの滝と云う地名がある。スサノウの命が蛇をやつつけた草薙の剣を洗った滝と云われる。これらも鉄の錆であり、温羅の吉備の地より御津・赤磐を経て石上布都



▶刀匠碑(岡山市北区出石町)

魂神社界隈を巡り、吉井川を下り長船に至り長船刀剣の基盤が構成されるまいか。

第十一回 緒方洪庵と岡山の門弟たち

九月二十九日、大瀨文男氏が「緒

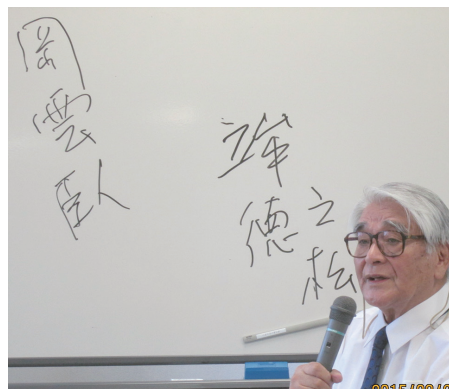
方洪庵と岡山の門弟たち」と題して講演された。四十三名が参加。緒方洪庵は文化八年(一八一〇年)備中足守藩の下級武士の三男として生まれ、十五歳の時、父と共に大坂に出る。そして中天遊の私塾「思々斎塾」にて蘭学、主に医学を学んだ。その後、江戸へ出て坪井信道に学び、さらに長崎へ遊学した。後、天保九年(一八三六年)に大坂に帰り、蘭学塾「適塾」を開いた。約三十年、医学、及び人材の教育に努めた。後の大阪大学医学部になる。

中天遊の門下の先輩、億川百記の娘、八重と結婚し、六男七女をもうけた。八重は塾生から母のように慕われた。福沢諭吉は「福翁自伝」の中で「非常に豪い御方であった」と回想し、また佐野常民は墓碑銘を書いている。大瀨さんは「思々斎塾」で学んだ最大の成果は先輩、億川百記の娘、八重と結婚できたことでは

たと考察したなら面白い史論ではあるまいか。

ないかと話された。

この「適塾」で、福沢諭吉、大村益次郎、佐野常民、橋本佐内らを育てた。弟子の数は六百名を超えた。その内、郷土の備前、備中、美作から四十七名もの子弟が参じた。大瀨氏自身の祖父もその一人であったとのこと。多くは医者の子弟。多くの資料、手紙等を陳列して開示された。蘭学から始め、英語教育をも志向したとのこと。松下村塾は主に倒幕を志向。が、適塾は人を育てること及び医学の普及に向ったと話され



▲大瀨文男氏

た。当時、天然痘は厄介な伝染病であったが、牛痘種痘法で治療を図った。足守に「足守除痘館」を開いている。

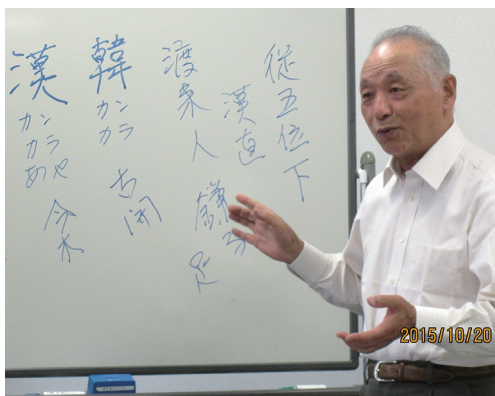
後、幕府の要請で江戸に出仕し、奥医師兼西洋医学所頭取に、そして「法眼」に叙せられるも翌年、享年五十四歳で死去したとのこと。最後に、大瀨さんは歴史への興味、関心を深めるために自分史を書くことを奨められた。

第十二回 歴研サロンの大化の改新・謎の人物を聴いて

大化の改新・謎の人物を聴いて

昔から興味深かった大化の改新について「大化の改新・謎の人物」という演題に魅かれ、歴研サロンに参加した。参加者は三二名。好きな奈良へは五回ほど出掛けた。藤原鎌足を祀る談山神社には「多武峯(とうのみね)縁起絵巻」の絵が並び、中でも「入鹿(いるか)」の首が高々と飛ぶ絵は印象深い。

演者、富久豊氏は六十歳定年後、大化の改新の中の闇の部分に惹かれ、そして書かれた《次頁へ》



▲富久 豊氏

《前頁から》『闇人』(文芸社)と言う歴史小説の内容を講演された。大化の改新を成し遂げた中大兄皇子と中臣鎌子の生涯を、二人を陰で支えた山師集団を絡ませながら、大和王権の成立過程を話された。史実を基に調査、そしてなぜ、なぜを繰り返して探究され、まとめられた小説は私の知らないことが沢山あり、興味深い講演だった。

「大化の改新」での暗殺は本当に五人で計画したのか、ユーモアも交え、色々の政治的な駆け引きを突っ込んで述べられた。中大兄皇子の実母は時の皇極天皇である。この事変二日後、孝徳天皇に譲位された。生前の譲位は過去に例はない。用意さ



赤磐市山陽郷土資料館にて友實市長(最前列右から3人目)

第十三回 赤磐市くまなく探訪

来年には「闇人Ⅱ」として今回の話しの続きを発行される予定とのこと。内容は壬申の乱とその後の継承

十一月七日、三十八名が赤磐市を探訪した。前日までの予報では雨天であったが、幸いにも日中は雨が降らず、助かった。

問題、そして「古事記」「日本書紀」の成立過程。是非とも「歴研サロン」で又、聴きたいものである。

(会員 近藤孝正)

顧問の佐藤光範氏と野崎豊氏の案内で十箇所を訪問した。

バスの中、佐藤光範氏より古墳や銅について歯切れの良い説明を聞き、予習ができた。

最初に岡山市牟佐にある牟佐大塚古墳を見学した。古墳に入り、巨石の大きさ(県下三大巨石墳)に驚いた。石棺の石材は井原市浪形山産出の貝殻凝灰岩とのこと。

次に、水濠にある両宮山古墳を訪ねた。古墳の中堤を歩き、墳丘と備前国分寺跡を眺めた。墳丘の全長は二百六m。造山古墳、作山古墳に次いで県内三番目の大きさである。

そして赤磐市山陽郷土資料館を訪ねた。赤磐市の友實市長の出迎えを受け、記念写真を撮った。赤磐市の考古資料の収蔵・展示品について学芸員の判り易い説明に参加者一同うなずいた。

▲ゆるぎ岩(危ない！
本当に大丈夫なの？)

続いて、健脚の人は山の上にある岩神社に登り、拝殿奥の磐座、ゆるぎ岩に上がり本当に揺れるか確かめた人もいた。

昼食は、神社の境内で山菜おこわ弁当や赤飯弁当に舌鼓を打った。

午後からは赤磐市の最北端、是里にある宗形神社に参拝した。

次いで訪ねた石上布都魂神社には、予定を一時以上遅れて到着し、宮司からきつくお叱りを戴いた。境内では氏子の女性達が歓迎のお茶の準備をしてくれていた。この時購入したお米は非常に美味しかった。帰った後にお米一俵、追加購入した。石垣模様の珍しい三代天神を巡り、最後にサッポロ岡山ワイナリーに立ち寄りワインで喉を潤した。そして、土産を買い求めた。

岡山歴史研究会設立五周年記念

DVD 記録集 『岡山歴研五年の歩み』

岡山歴研は平成二十二年十月に設立されました。おかげをもちまして五周年を迎えることができました。

五周年を記念して『岡山歴研 五年の歩み』の記録集をDVDで作成しました。

五年間の活動記録・資料集です。パソコンで使用するようしており、プリンターがあれば印刷も可能です。

内容は①活動表(年度別) ②写真(多数)

③会報(カラー版 創刊号～十四号) ④新聞掲載記事 ⑤設立準備会 ⑥全国歴研

⑦定期総会 ⑧探訪会(一～十三回) ⑨歴

研サロン(一～十三回) ⑩歴研講座(一

～四) ⑪会員交流会 ⑫歴史関連団体調

査 ⑬その他

ファイル数(約千件) フォルダ数(約

百五十件) 容量サイズ(約1GB)

販売価格…五百円(税込み) 送料…百円
申込…岡山歴史研究会事務局へ

お知らせ

第十三回

歴研サロン

「歴史小説創作の苦心と喜び」

(鼎談) — 小説家三名が本音で語る —

講師 岡将男氏、富久豊氏、平茂寛氏

(歴史小説家会員三名)

日時 二月二十八日(日) 十三時半～

場所 きらめきプラザ二階大会議室

(旧国立病院跡)

参加費 会員・一般とも 五百円

定員 六十名・要申込(事務局)

来年度4月からの
会費増額のお知らせ

会費は現在年額2千円ですが、会員としてのメリット向上策の検討も含めて企画委員会、運営委員会での方向付けを踏まえて、来年度4月から年額3千円に増額を予定しております。

発足以来5年間、2千円の年会費を基に、活動内容を会報発行では年1回から3回、紙面も4頁から8頁に、そしてホームページの開設、歴研サロンと歴研講座の実施、探訪会年3回実施等々財源確保も工夫しながら充実してきました。今後、現状を維持し、更に充実させていくためには、消費税が再来年度には8%から10%になることが確定していることも考慮すると2千円のままでは運営が難しくなります。是非とも千円の増額について会員皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

【訂正とお詫び】

前号 九頁 岡山の甲冑の文章

二段 十四行目

(誤) 関東で作られた

(正) 関東武士が使った

三段 一行目

(誤) 鎌倉時代になると甲冑が完成され、

(正) 鎌倉時代の甲冑では、

以上、訂正し、お詫びいたします。

■編集後記■

五周年記念行事として会員交流会が開かれた。三九名が参加。これからの歴研について喧々諤々。疑問を見つけてそれを解明するのが歴史を研究する楽しみ、それと比較検討しないと歴史的事実も客観視できないという二つの意見に共鳴した。

県内の歴史団体調査結果を見れば、固有名詞を持たないのは岡山歴研だけ。同じく持たない全国歴史研究会の岡山版を目指してはどうかと思いました。(楠)

お知らせ

第14回探訪会

新春ウォーク

西川・枝川公園界隈

日時：1月10日(日)

集合場所：緑道公園北端・入口
(きらめきプラザ北西角・案内
標識あり)

集合時間：9時45分

参加費：500円(資料/保険)

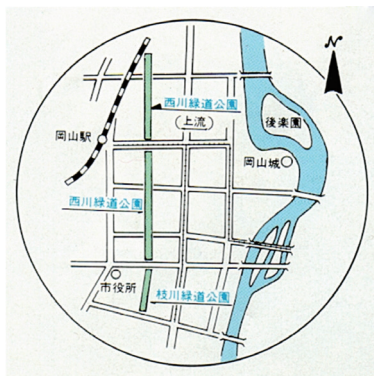
解散：13時頃 流れ解散

案内：岡山市観光ボランティア
ガイド

行程：西川の遊歩道を流れに沿い
歩く。途中、宇喜多家の菩提寺
光珍寺、セントラルホテル10
階(武家屋敷杉山邸の一部を移
築)を見学。旧2号線を超え
枝川の終わりまで約3Km。

参加申込：岡山歴研事務局

申込〆切：1月5日



発行 岡山歴史研究会

会長 天野勝昭

編集長 楠敏明

事務局 〒701-1133 2

岡山市北区平山 844-86 山本方

電話 086-287-6226

